

哀しみの軽業師

広田弦一



逆立ち男

1 逆立ち男

大貫芳彦は、ベンチに腰を下ろし、上着のポケットから煙草を取り出すと、百円ライターで火を点けた。

「この一本で、終わりにしよう」

夜中の零時ともなると、昼間の賑わいが嘘のように静まり返っています。この大沢公園には、ベンチに腰掛けていた芳彦以外にまるで人影は見当たりません。芳彦の鼻から吹き出している煙草の白い煙が妙に生気を帯びているのは、不思議なものです。

<アパートに戻っても、何もすることがないし……>

そう思うと、芳彦は、下宿先のアパートに戻るのが、億劫に思いました。

<あの薄汚いアパートの六畳間にいるよりも、この公園のベンチに腰掛けてる方が、余程気が紛れるというものだ>

そう思うと、ベンチから立ち上がるのに、踏ん切りがつきません。

すると、その時です。

「何だ、あれは……」

芳彦は、驚きの声を上げました。

というのは、公園の隅の方に鎮座しているジャングルジムに奇妙な光景を眼にしたからです。

そいつは、ジャングルジムのてっぺんの管をしっかりと握り締め、逆立ちしているのです。

最初に見た時は、そいつが何だか分かりませんでした。しかし、月を覆っていた雲が流れ、月明かりが一層鮮明になった時、そいつは明らかに人間だと確信したのです。そいつは、芳彦の座っているベンチから見ると、後姿で、顔は見えませんでした。

<誰だろう。こんな夜中にジャングルジムで逆立ちなんかして……。きっと頭がおかしいんだろう……>

そう思ったものの、このまま、そいつがどんな人なのか、見もしないで帰るのは、惜しい気がしました。せめて、顔だけでも拝顔してやろうという衝動に駆られました。

それで、芳彦は恐る恐るジャングルジムの方に近付きましたが、そいつは依然として、微動だにしません。

「いい加減にくたびれていい頃だが……」

だが、そいつは依然として、逆立ちしたままです。

それで、芳彦はそいつの顔が見える場所に移動しました。そして、素早くそいつの顔に眼をやりました。

すると、芳彦は、

「ぎょ！」

と、小さな叫び声を上げては、後退りしました。何故なら、そいつは人間とは思えないような顔だったからです。

眼はピンポン玉のように真ん丸く、鼻と口の所に小さな穴があいてるだけのような人間だったからです。まるで雑誌で見たことのある妖怪のような顔だったのです。

それで、芳彦は無我夢中で、その場から逃げ出しました。

「ケケケ……」

という笑い声が聞こえたような気がしました。

しかし、芳彦は決して、後ろを振り返ろうとはしませんでした。今度あの顔を見れば、気絶してしまうのではないかと思ったからです。

公園から逃げ出した芳彦は、駆け出すのを止めました。そして、
<待てよ。あんな化け物がこの世の中にいる筈がない。あれは、仮面を被っているだけだ。そうに決まってるぞ！>

と、大学生らしく、冷静な考えが閃いたのです。

<俺が見たかったのは、素顔のあいつだ！ ジャングルジムに逆立ちをしてる頭のおかしいあいつの素顔だ！>

芳彦は、そう思うと、気を取り直し、再び公園に、早足で向かいました。

<あいつ、まだいるだろうか……。いるとしても、まさかいくら何でもジャングルジムで逆立ちはしてないだろう……>

芳彦は、やがて、公園に戻ると、周囲の茂みから、そっとジャングルジムを見やりました。しかし、あいつ姿は見当りません。

「やっぱり駄目か……」

芳彦は呟くように言っでは、肩を落としました。そして、

<最初から、もっと冷静さを保つべきだったんだ>

と、悔恨の思いが込み上げて来ました。

そんな芳彦は、ジャングルジムの管を掴み、ジャングルジムを上り始めました。そして、程なくてっぺんに来ました。

<あいつのように、逆立ちをしてやろうか>

芳彦は、そう思いました。

しかし、地上で逆立ちをするのも、苦手の芳彦です。そんな芳彦が、ジャングルジムで逆立ちが出来る筈はありません。

それで、芳彦は諦め、ジャングルジムのてっぺんに腰を下ろしては、辺りを見回しました。

公園は、既に午前零時を過ぎてしまってるので、ひっそりと静まり返っています。

芳彦はジャングルジムのてっぺんに腰を降ろしたまま、辺りを見回し続けました。ジャングルジムのてっぺんから見る光景が、ベンチからのものと違い、趣があったからです。

しかし、程なく、

<子供じゃないなんだよ>

そう思うと、芳彦は苦笑しました。ジャングルジムは、子供の遊び道具です。大学生にもなった芳彦が、まるで子供の遊びのようなことをやってしまって……。

そう芳彦が思ったその時です。

何処からともなく、

「ケケケ……」というような笑い声が聞こえたような気がしました。

<気のせいだろうか……>

芳彦は、耳を研ぎ澄ませました。

すると、

「ケケケケ」という笑い声が、再び聞こえたのです。

<この笑い声は、あいつのものだ>

そうです。あの逆立ち男です。真夜中にジャングルジムで逆立ちをしていたあいつの笑い声です。

芳彦は、その笑い声が聞こえた方を見やりました。

すると、公園の入口付近にあいつがいました。あいつは、芳彦を見て笑ったのです。あのピンポン玉のような真ん丸い眼。小さな穴が開いただけのような鼻と口。

そんなあいつは、何だか芳彦を手招きしてるようです。

そんなあいつを見て、芳彦は「カッ!」としました。

最初、あいつを見た時は、恐怖心を抱きましたが、今、あいつを見ると、滑稽に見えて来るのです。そんなあいつに手招きされるとは、何だか馬鹿にされてるような気がしたのです。

芳彦は、平静を失いました。そして、ジャングルジムを降り、あいつの方に駆け出しました。すると、あいつも駆け出したのです。

あいつと芳彦の駆けっこが始まりました。

あいつは、どンドンと走って行きます。

しかし、芳彦も負けてはいません。しかし、あいつとの距離は縮まりません。

芳彦は、いい加減に疲れて来ました。そして、汗が滲み出て来ては、「ハアハア……」と、大きく息をついたのです。

「もう止めた。休もう」

幸、丁度近くに、椅子位の高さの大きな石がありましたので、芳彦はその石に腰かけました。

「ちくしょう。何と逃げ足の速い奴だ。あいつの足には、勝てそうもない……」

と、呟きました。そして、

<しかし、何の為に、あいつを追い掛けなければならないんだ>

と、再び冷静な考えを巡らせました。

そして、少し休むと、芳彦は気を取り直しました。そして、腕時計を見ると、午前一時を過ぎていました。

<よし。今日はこれで下宿に戻ろう>

と思い、腰を上げ、前方を見やりました。

すると、少し先の方に、あいつがまだいたのです。

あいつは、「ケケケケ」と、笑いました。

そんなあいつを見て、芳彦の動きが止まりました。

すると、あいつは再び手招きしました。まるで、「こっちにおいで」と、言わんばかりに……

。

それで、芳彦は少しずつあいつの方に歩み寄りしました。

すると、あいつは芳彦の歩調に合わせたように、芳彦の方を見やりながら、歩き出すのです。そんなあいつと芳彦の距離は、一向に縮まりそうにありません。

芳彦は、まるで磁石に吸い付けられたように、あいつの後に従って歩き出しました。

あいつは、まるで、人気の無い方にどンドンと歩いて行き、やがて、古びた家が立ち並んでいる裏通りへと曲がりました。

すると、芳彦は、

<随分と遠くに来てしまったようだ>

と呟いては、眉を顰めました。この辺りは、芳彦の下宿先のアパートとは、反対方向にあったのです。

それはともかく、あいつはその古びた家の中の庇が壊れかけてる一軒家の前に来たかと思うと、ドアを開けては中に入って行きました。

それを受けて、芳彦は、どうすればよいか、迷いました。

しかし、あいつの家を訪ねてみようかと決断しました。

というのも、あいつは芳彦の尾行を知ってるに違いないと確信していたからです。

それで、芳彦はあいつの後を追うかのように、古びたドアを開けては、

「ごめんください」

と、恐る恐る言いました。しかし、中からは何の反応もありません。また、家の中は真っ暗です。

それで、今度は、

「ごめんください！」

と、先程の声よりは、遥かに甲高い声で言いました。

しかし、やはり、何の反応もありません。

<おかしいな。あいつは、この家に入ったことは、間違いないのだが.....>

それで、芳彦はドアを開けたまま、今しばらくの間、待ってみました。しかし、中からは、何の音一つとして、聞こえて来ません。

すると、芳彦は意を決したような表情を浮かべては、

<よし。こうなったら、中に入ってみよう>

そう決断したものの、芳彦の表情は、忽ち曇ってしまいました。というのは、懐中電灯で辺りを照らしてみたのですが、懐中電灯の薄明かりの中で、家の中が埃だらけだということが、一目瞭然だったからです。つまり、靴を脱いで歩けば、靴下が埃まみれになるのは、請け合いだったからです。

<この靴下、新品なんだよ>

貧乏学生の芳彦は、正にけちんぼだったのです。

しかし、折角ここまで来たからには、中に入らず帰るとなれば、後悔するに決まっています。

それで、芳彦はとにかく、靴を脱ぐと中に入って行きました。そして辺りを懐中電灯で照らして

みました。何しろ、家の中は真っ暗です。懐中電灯の明かりがなければ、何も見えないといった有様です。

そして、辺りを照らした結果、分かったことがありました。

というのは、この古びた家は二階建てだと思っていたら、そうではなく、一階建てで、天井の方は、梁がまるでジャングルジムのように交差していたのです。こんな家を芳彦は、見たことがありません。

<全く、変な家だ>

そう思うと、芳彦は懐中電灯で注意深く辺りを照らしてみるや否や、忽ち、

「ぎょ！」

と小さな叫び声を発してしまいました。というのは、中年男が部屋の中で大の字になっていて、そんな男の胸にはナイフが深々と突き刺さり、また、男は口から血を流していたからです。

その光景を眼にし、芳彦は冷静さを失いました。もう、恐怖心で胸が一杯となってしまったのです。

「誰か！ 誰か！」

と、大声で叫んだ時は、もう路地に駆け出していました。

だが、真夜中のことです。通りには人はまるでなく、また、辺りはしんと静まり返っています。そんな中で誰が芳彦の声を聞くというのでしょうか。

芳彦は、このことを誰かに早く知らせたいと思いました。しかし、その誰かとは、お巡りさんしか、思い当りませんでした。

それで、交番に行こうと思いましたが、あっさりと諦めました。というのは、とても眠たかったからです。

それで、アパートに戻ると、まるで死んだように、眠りこけてしまいました。

翌朝早く、芳彦は交番に駆け込みました。そして、

「人が死んでるんだよ！」

そして、芳彦はお巡りさんを伴って、昨夜の古びた家に向かいました。

そして、鍵が掛かってないことを確認すると、お巡りさんと共に中に入り、そして、男の死体があった部屋に来ました。その部屋は、昨夜と同じく、まるで真夜中のように真っ暗でした。それで、懐中電灯で、昨夜男が死んでいた場所を照らしてみたのですが、何故か、男の死体は見当りません。

その事態を目の当たりにして、芳彦の表情は、怪訝そうなものへと変貌しました。

それで、他の部屋も探してみたのですが、やはり、男の死体は見当りません。

それで、芳彦はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべたのですが、そんな芳彦に、お巡りさんは

「君！ 見間違えたんじゃないのかな」

と、薄らと笑みを浮かべては言いました。

しかし、芳彦は返す言葉はありません。

「酒でも飲んでいたんじゃないのかな」

そう言うと、お巡りさんは、さっさと帰ってしまいました。

<こんな筈じゃなかったんだが……。確かに見たんだよ>

芳彦は、お巡りさんが去って行ったといえども、まだ納得が出来ず、もう一度、荒ら家の中を探してみたのですが、やはり、死体は見付かりませんでした。

その芳彦の様子を、さも面白そうに見ていた男がいました。

そうです。あいつです。ジャングルジムで逆立ちをしていた男です。逆立ち男は、荒れ屋の天井の梁の陰に身を隠し、芳彦を見詰めていたのです。芳彦も、まさか、天井の梁から見てる男がいるなんて、思いも寄りません。

「仕方ない。この辺で帰ろう」

芳彦は呟くようにっては、ドアを開けました。

すると、その時です。

「ケケケ」

という笑い声のような声が聞こえました。

しかし、芳彦は立ち止ることなく、

<気のせいかな>

と、その声を気にすることもなく、家路についたのです。

2 睨み合い

「今日がついていたな」

芳彦は、公園のベンチに腰を下ろし、快い気分には浸っていた。というのは、競馬に勝ったからです。僅かな元手を10倍にしたのです。いつも負けっ放しの芳彦が満足げな表情を浮かべるのは、もっともなことです。

そんな芳彦は、まだしばらく、午後九時を過ぎた、今や誰もいない公園のベンチに腰を下ろしていたのですが、

<もうそろそろ帰ろう>

そんな芳彦は、もうあのジャングルジムの逆立ち男のことも、忘れつつありました。何しろ、あの日から、もう一ヶ月が経過しようとしているのです。

また、あの荒ら屋での死体のこともです。あの死体は、お巡りさんが言ったように、幻だったのかもしれない。

芳彦は決してそうではないと思うのですが、しかし、努めて幻であったと思うようにしました。

<僕が殺したわけでもないんだ。忘れてしまえばいいんだ>

と、芳彦はあの死体のことを忘れようとしていました。

そんな芳彦は、改めてジャングルジムを見詰めました。そして、

「こんな時間にジャングルジムに上ってる奴なんているものか」

確かに、今や、公園にはまるで人は見られず、況してや、ジャングルジムで遊んでる輩がいる筈はありません。

芳彦は程なくベンチから腰を上げました。

すると、その時です。

「ケケケケ」

という声が聞こえたような気がしました。

<気のせいかな>

芳彦は頭を振りしました。

<鳥の声かな>

と思ったりもしました。

そんな芳彦は、その声など聞こえなかったかのように、公園の出入口に向かって歩き始めました。

すると、その時、

「ケケケケ」

と、またしても、その声は聞こえたのです。

芳彦は、その声が聞こえた方を見やりました。その声は、公園の出入口とは反対側の木立の方

から聞こえたのです。

しかし、さっと見た限りでは、誰もいないようです。

ところが、そんな芳彦のことを嘲笑うかのように、「ケケケケ」という声が、またしても聞こえたのです。まるで、怪鳥のような声が……。「あいつだ！」

芳彦は、逆立ち男のことを思い出しました。そうです。あのジャングルジムの逆立ち男のことです。

芳彦は、木立を注視しました。

すると、三メートルは優にありそうな大木のでっぺんに、あいつが芳彦の方を見やっては、ニヤニヤしてるようなのです。あのピンポン玉のような真ん丸い眼、小さな穴が開いただけの鼻と口あの逆立ち男がまたしても現われたのです！

「こんちくしょう！」

芳彦は、あいつ目掛けて走り出しました。

すると、あいつは、ぴょんと大木から飛び降り、一目散に走り出したのです。

「何て逃げ足の速い奴だ！」

芳彦は、決して足が速い方ではありません。

しかし、元気盛りの大学生です。本気で走ったら相当なものです。

しかし、あいつも芳彦に負けない位の速さです。更に、あいつは実に身軽と言わざるをえません。大木からさっと飛び降り一目散に逃げ始めたあいつの姿は、まるで床運動をしている体操選手のような印象を抱かせるのです。床を軽やかに飛び跳ね宙返りするかのような躍動感。そういったものが、あいつには感じられるのです。まるで、全身ばねの塊かのようなのです。

芳彦が息を切らして立ち止ると、あいつも立ち止ります。

芳彦がはあはあと息をついてるのに、あいつは何と屈伸運動してるではないですか！そして、芳彦の方を見やっては、ニヤニヤと笑ってるのです。

しかし、芳彦はそんなあいつを見ていると、何だか馬鹿馬鹿しくなって来て、あいつを追っかけるのは止め、帰ろうかと思いました。

しかし、あいつは以前のように、「来い、来い！」と、何だか手招きしてるかのように思えるのです。

<こうなったら、とことんあいつを追っかけてやろう！>

芳彦は、決意しました。

芳彦は歩き出しました。すると、あいつも歩き出しました。あいつは、芳彦の速度に合わせるかのように歩くのです。

<何処に行くのだろうか>

あいつは、どンドンと人気の無い寂しい方へと向かって行きます。そして、やがて、見通しのよい原っぱにやって来ました。辺りに人気はまるでなく、そこは、丁度野球場位の広さの原っぱです。こんな所に芳彦を連れて来ては、一体何をし始めようとするのでしょうか。

「ケケケケケ」

遂にあいつが笑いました。その笑い声は、ひっそりと静まり返った夜空に深く浸透して行きました。

芳彦は、気持ちが悪くなりました。誰もいない夜の原っぱで、あいつが「ケケケケ」と笑っています。その光景を不気味と言わず、何と云えばよいのでしょうか。

そう思うと、芳彦は堪り兼ねて、

「アッハッハッ！」

と、大声を出しました。いくら大声を出したからって、あいつ以外にその声を聞く者なんて、いないのです。日頃の積もりに積もった自らへの不満、社会への不満、それらが一気に大声となって、芳彦の口から爆発したのです。

すると、どうでしょう。今まで芳彦のことを小馬鹿にしてたようなあいつが、急に顔を強張らせたかのように見えたのです。ピンポン玉のような真ん丸い眼、穴が開いただけの鼻と口のあいつの顔の変化を確認することはなかなか難しいのですが、芳彦には、そのように見えたのです。

そして、芳彦はあいつと目が合いました。

そして、一瞬ではありますが、あいつと睨み合ったのです。

すると、あいつは、

「キー」

という大声を上げました。

そんなあいつの声に、芳彦は度肝を抜かれました。というのは、その叫び声が、あまりにも哀しげだったからです。

それは、まるで犬が自動車に轢かれ、死を前にした最後の絶叫を上げるかのような哀しみを帯びた声だったのです。

しかし、芳彦は更に驚きました。あいつは、叫び声を上げたかと思うと、タッタッタッと走り出し、何と宙返りしたからです。

そして、宙返りは、三回連続して行なわれました。正に、体操の選手が床運動で宙返りをしたとでも言いましょうか、あるいは、忍者が敵の攻撃を切り抜け、退散する時に見せる宙返り、正にそれらを彷彿させるような光景でした。

芳彦は、そんな光景があまりにも予想してなかったものであったので、啞然とした表情を浮かべては、その光景をただ見惚れてるだけでした。

そして、あいつは宙返りしたかと思うと、闇夜の原っぱをタッタッタッと走り抜け、芳彦の前から姿を消してしまっていたのです。

3 怪物

奥田大吉の駅を出る足取りは、軽快そのものでした。高校を卒業すると、某電気メーカーに就職し、二年も経つと仲間も増え、給料も少し上がり、郷里の両親に仕送りが出来る程の余裕振りです。

「これで、彼女でも出来れば、文句がないのだが」

と、贅沢な愚痴を零してるこの頃です。

学生の頃は、1Kのおんぼろ木造アパート暮らしでしたが、今は、ユニットバス付きのワンルームマンションに住んでいます。学生時代と比べれば、まるで夢のような感じです。

しかし、駅から十三、四分歩かなければならないのは、些か不満です。しかし、駅に近い高い物件は、まだ手が出ないのです。

それはともかく、辺りは新興住宅街で、昔は山林だった所が、次から次へと潰され、団地が造成されました。大吉のワンルームマンションもそういった場所に建てられたのですが、辺りはまだまだ昔ながらの山林があちこちに見られます。

大吉は、そういった山林の中を切り開いた道を今、歩いています。そして、後、百メートル程歩かなければなりません。その百メートルを抜けると、団地が広がるのですが、今は周囲が木立ばかりの寂しい道です。

大吉の心は、今、弾んでいます。高校を卒業してからは、順風満帆そのものだったからです。

それ故、後少しで塀に着けるのかと思うと浮き浮きした気分になるのも、当然でしょう。大吉にとって、会社勤めを終え、我が家に向かう道を歩いてる時が、最も楽しい時間なのですから。

そして、木立の中の道を五十メートル程進んだ頃でしょうか。

「ケケケケ」

という声が、何処からともなく聞こえたような気がしました。

「鳥だろうか」

大吉は、首を傾げました。

この道を通るようになって二年になるのですが、今までこのような声を耳にしたことがなかったからです。

しかし、大吉は構わず歩き続けました。

すると、

「ケケケケ」

という声が、また聞こえたではありませんか。

「何だろう」

大吉は、周囲を見回しました。だが、辺りには特に眼に留まったものはありません。

大吉は、何だか怖くなって来ました。早く、この場から逃げ出したいと思いました。

すると、

「ケケケケ」

という声は、またしても聞こえたのです。

その声は、木立の中を木霊しました。人間の声なのか、鳥の声なのか、それとも、得体の知れない化け物の声なのか……。

すると、その時、駅の方から自動車が走って来ました。自動車は、大吉の方にぐんぐん近付いて来ます。

そして、そのヘッドライトの明かりが、辺りを照らし、その明かりがふと、木立の上の方を照らしました。

それで、大吉は上の方を見やったのですが、すると、大吉はその時、

「ぎょ！」

と、小さな叫び声を発しました。というのは、木立のてっぺんの方に、得体の知れないものを発見したからです。

それは、木に上った猿とでもいいでしょうか。木のてっぺんに上った猿が「どうだ！」とも言わんばかりに愛嬌を振り撒いてるかのような仕草をしているのです。更に、驚いたことに、

「ケケケケ」

と、声を上げたのです。「ケケケケ」の声の持主は、そいつだったのです。

大吉は、そいつを注視しようとした。

しかし、自動車のヘッドライトの明かりが消え去って行くと、木立は以前の暗闇の中に沈んでしまったのです。

<幻を見たのだろうか>

大吉は、そう信じたかったのですが、あの「ケケケケ」という声を聞いたことは間違いないのです。

「わあ！」

大吉は、声を上げては、無我夢中で駆け出しました。埒に戻った時は、もう汗びっしょりでした。

<悪い夢をみたんだ>

大吉は、自らにそう言い聞かせたのでした。

その夜は、大吉にとって寝苦しい夜となりました。あの「ケケケケ」という笑い声が頭にこびりついて、深い眠りに落ちることが出来ないのです。

それで、大吉は仕方なくベッドから起き上がりました。

「煙草でも、喫ってみるか」

大吉は、机の上に置いてある煙草を手にしては、ライターで火を点けました。すると、幾分か気分も落ち着いて来ました。

すると、その時です。

窓を「トントン」と、叩く音が聞こえました。

<何だろう……。空耳かな>

大吉は、耳を研ぎ澄ましました。

すると、

「トントン」

という音は、またしても聞こえたのです。

窓はカーテンが閉められてるので、外の様子を見ることは、出来ません。

それで、大吉は窓に近付き、カーテンを少し開けては、外を覗き見しました。

すると、突如、そいつは大吉が外を覗き見するのを待ち構えていたかのように、さっと窓ガラスを挟んで、大吉の顔にそいつの顔を押し付けたのです。

「ぎょ！」

大吉は、思わず小さな悲鳴を発しては、後退りしました。

あいつです！ あの「ケケケケ」という笑い声を立てたあいつが、今、大吉の眼前にいるのです。あいつとの境といえば、一枚の窓ガラスしかありません。

大吉は、鳥肌が立ちました。あいつは、恐怖に震えた大吉の表情を見ると、さも満足そうに、またしても「ケケケケ」と笑いました。大吉は、もう真っ青です。

「助けてくれ！」

と、そう叫びたかったのですが、恐怖の為に、まるで金縛りに遭ったかのように、声を出すことが出来ません。

そんな大吉は、ベッドに転がり込んで、布団を頭から被り、恐怖に震えた一夜を過ごしたのです。

翌朝、通りに人の声が聞こえるようになると、大吉は恐る恐る窓に近付き、開けたのですが、外には誰もいません。見慣れた風景が眼前に飛び込んで来ただけです。

そんな光景を眼にすると、大吉は、

<昨夜のことは、夢だったのだろうか……。幻だったのだろうか>

という思いが、ふと過ぎりました。

しかし、昨夜、大吉は酒に酔っていたわけではありません。大吉は、それ故、昨夜の出来事をどうしても否定することは出来ないのです。

そして、その後一週間は何事もなく、平穏な日々が続きました。ところが、恐怖の出来事は、またしてもやって来たのです。

その日、大吉は差出人不明の奇妙な手紙を受け取りました。

<明日の夜の午前零時に松風公園に一人で来ること。もし、来なければ、いかなる災いを受けても知らないぞ>

というふうに書かれていました。

大吉は、読み終わると、

<馬鹿馬鹿しい>

と、この手紙を一笑しました。

しかし、大吉はその夜、何もすることがなく、好奇心も加わって、その手紙に書かれていた通り、松風公園に時間通りに行くことにしました。

松風公園とは、大吉のアパートからさほど遠くない岩淵川に近い所にある公園です。昼間は、

広い芝生があったりして、結構人の姿が見られるのですが、夜はひっそりと静まり返っています。

そして、午前零時ということで、公園は案の定、静まり返っていました。

大吉は、公園の中央に向かって歩き出しました。

松風公園は、広々とした公園で、公園の中央に近付けば、視界を遮るものといえば、夜の闇だけです。しかし、街灯の明かりが辺りを照らしている為に、辺りの様子はぼんやりと分かります。

大吉はといえば、辺りを見回しては、

「誰もいないじゃないか……」

と、呟きました。

<きつと悪戯だろう>

大吉は、わざわざ出向いたことを後悔した位でした。

すると、その時です。

<ケケケケ>

という笑い声が聞こえました。

「この笑い声は……」

そうです。あの不気味な笑い声です。一週間前に自宅のアパートで耳にしたあの不気味な笑い声です。

大吉は、身震いしました。

しかし、逃げるにも、逃げようがありません。何しろ、公園のど真ん中にいるのですから。

あいつの笑い声は、徐々に大きくなって来ました。どうやら、こちらに近付いているようです。

「くそ！」

大吉は、逃げることは、出来ません。

<こうなったら、あいつと闘うだけだ>

と、開き直り、拳を握り締めたのでした。

「ケケケケ」の声から判断すると、あいつは間近にいるに違いありません。街灯の明かりが届かない場所がある為に、その辺りにあいつが潜んでいるに違いのないのです。

「出て来るなら、出て来い！ この化け物め！」

大吉は、大声で叫びました。

すると、あいつが「タタタタ……」という駆け足音と共に、大吉の前に踊り出て来たではありませんか！

あいつは、ピンポン玉のような真ん丸い眼、穴が開いただけの鼻と口、そして、狼のような耳をしていました。

その顔を路上で間近に見たとしたら、真っ青になって逃げ出すに違いありません。

しかし、ここは、誰もいない公園のど真ん中です。

そして、そのことは、却って大吉を大胆にさせたのです。

二人は、しばらく睨み合いました。まるで、激しい火花が散ったように。丁度、餌を前にして対峙する肉食動物のように……。

大吉は、激しい恐怖心に包まれました。あいつを威嚇しなければ、こっちが殺られてしまうのではないかと思ったのです。

その恐怖心、防御心が、激しい大声となって、大吉の口から溢れ出ました。

「この化け物め！」

と、大声を上げたのです。

すると、そいつの拳動が、ぴくりと止まったように感じられました。そして、徐々に後退りし始めたのです。

「うお！」

と、あいつは突如、奇声を発しました。

その声は、静まり返った公園の中に木霊しました。そして、その声は、哀しい叫び声のようにも聞こえました。

そして、そいつは床運動の体操選手が飛び跳ねるかのような宙返りをしながら、闇夜へと姿を消したのです。

大吉は、あいつが去って行ったのを見届けると、どっと疲れが出て来ました。そして、地面に平伏し、そのまま深い眠りについてしまったのです。

4 哀しみの同窓会

大貫芳彦は、アパートの古びた郵便受けを眺めました。

それは、色褪せた薄汚れたものでした。何十人もの賃借人たちの郵便受けが並んでるその一つに、芳彦のものがあるのです。

「僕に手紙なんて、滅多に来やしないだろう」

と思うものの、毎日郵便受けを覗いたりしてるのです。

ところが、今日は珍しく、手紙が入っていました。

それで、差出人を見たところ、郷里に住んでいる母親でした。

それで、芳彦は部屋に戻るや否や、封を開けました。

『来月の一日に、小学校の同窓会が行なわれるので、都合をつけて、帰郷すること』

こういった内容が書かれていました。

しかし、それは、思い掛けないものでした。というのは、ここ十年程、同窓会なるものは、行なわれていなかったからです。

しかし、芳彦は郷里を懐かしく思う気持ちを抑えることは、出来ませんでした。

やがて、同窓会の日がやって来ました。

「よお、懐かしいじゃないか」

芳彦は、学友だった者たちに、次から次へと、声を掛けました。

皆、大人になったのですが、一眼で誰だったのか、分かります。

芳彦は、長年顔を合わせたことのない学友たちの顔ぶれを見て、随分と懐かしさが込み上げて来たのですが、特に親しかった友人の顔を見付けました。それは、奥田大吉です。

「よお、大吉ちゃん！」

芳彦の声は、弾みました。

「芳ちゃんか。久し振りだな」

二人は、肩を叩き合いました。二人は、大の仲良しだったのですが、大吉は、父さんの仕事の関係で小学校六年の時に転校して行き、その後、交友関係は途絶えてしまったのですが、それが、十二年振りの再会となったとなれば、懐かしさが込み上げて来るのも無理はありません。

二人は、それぞれ、今、何処に住んでるのか、仕事は何をしてるのか、彼女は出来たのかとかいう話をしました。そして、話はいつの間にか、小学校時代への思い出へと移って行きました。

「吉田の直ちゃん、向井の明ちゃんたちとも、仲良く遊んだなあ……」

大吉は、それらのことが、まるで昨日の出来事のように思い出されるのです。

そして、二人は集まった顔振れのことを改めて見回しました。

そして、いかにも愉しげな表情を浮かべていたのですが、その時、芳彦の脳裏に暗い翳が過ぎりました。それは、とてつもなく大きな翳のように思えました。

「あいつ、どうしてるだろう……」

と、芳彦は呟くように言いました。

「あいつって？」

大吉は訊きました。

「蛭田虎吉だよ」

その名前を耳にすると、大吉の表情にも、一気に翳が過ぎりました。

話は十二年前に遡ります。東村小学校の昼休みの一時でのことです。

「盗人の蛭田がいるぜ！ からかってやろうよ」

数人の悪ガキが、蛭田虎吉の前に歩み寄りました。虎吉が、校庭の隅で、一人でぽつんと立ち止っては、空を見上げています。

「おい、虎吉！ 今日は何を盗むつもりだ？」

と、悪ガキの一人が言いました。

「おらあ、何も盗んでいやしない！」

虎吉は、悪ガキを睨み付けました。

「嘘つくな！ お前のおっ父は、大泥棒だぜ！ 花屋さんから花を盗んだと思ったら、電気屋さんからは、ラジオを盗む。俺たちの村の恥晒しだぜ！ おっ父の血を引いてるお前が、盗みをしてない筈がないじゃないか！ お前は、盗人なんだよ！」

「違うわい！ おっ父は盗んではないよ！ 盗んでなんかいない！」

「嘘をつけ！ お前、嘘までつくのか！ この嘘つき野郎！」

「違うわい！」

虎吉は、悪ガキたちの罵声を浴び、遂に声を上げて泣き出してしまいました。そして、運動場の真ん中に向かって一目散に走り出しました。

そんな虎吉の後ろ姿に、悪ガキどもは、

「この盗人野郎！」

と、強い罵声を浴びせました。

すると、その時です！

虎吉は何と宙返りして見せたのです！ 床運動の体操選手が宙返りするかのよう！ そして、それは、連続三回も見事に決まりました。

虎吉は、体操が得意でした。将来は、オリンピックの選手に選ばれるのではないかという声もありました。それ程、得意だったのです。

ところが、その後、不幸が起きました。毒薬です。誰かが、虎吉に毒薬を飲ませたのです。

理科の実験が終わった後の昼休みの時です。

弁当を食べ、水筒の水を虎吉は飲みました。ところが、その水筒の水に、毒薬が入っていたのです。

勿論、虎吉は水筒の水の中に毒薬が入っているなんて、夢にも思ってませんでした。お母さんから渡された水筒なのですから。

虎吉は、水筒の水を飲んですぐに、気違いのように苦しみ喚きました。そして、暴れ狂いました。

学校の先生が一人で押さえつけることが出来ず、数人の生徒が力を貸さなければなりませんでした。

そして、やっとのことで、虎吉を保健室のベッドに寝かせることが出来たのです。

そんな虎吉は、昏睡状態にありました。そして、三日間も寝続けたのです。

そして、四日目にやっと、虎吉は目を覚ましました。しかし、学校の先生のことが分からないのです。

「蛭田君！ しっかりしなさい！」

と、先生が言っても、虎吉は、

「ケケケケ」

と、笑うばかりです。

先生は、困り果ててしまいました。

そんな虎吉のことを聞いて、虎吉のお母さんが保健室に駆け付けました。

「虎吉！ しっかりして！」

と、お母さんが哀願するかのように言っても、虎吉は、

「ケケケケ」

と、無気味な声で、笑うばかりなのです。

そうです。虎吉は、頭が狂ってしまったのです。

毒薬です。毒薬で、頭が狂ってしまったのです。

お母さんがいかに哀しんだか、言葉で言いようがありません。虎吉は、精神に支障が生じたということで、その小学校に通うことが出来ずに、転校して行ったのです。

虎吉の水筒の中に、毒薬を入れたのは、大貫芳彦と奥田大吉だったのです。

何しろ、小学校の頃のことです。少し悪戯をしてやろうという位の気持ちで、危険物とラベルの貼られていた理科の実験室の棚に並べられていた瓶に入った液体を、虎吉の水筒の中に少しばかり注ぎ込んでおいたのです。何しろ、小学校の頃のことですから、その薬の恐ろしさのことは、分からなかったのです。

<盗人の虎吉めが！> そんな虎吉が、オリンピックの選手になるなんてことが、芳彦と大吉が快く思う筈がありません。

つまり、虎吉に対する妬みがあったのです。

でも、まさか、虎吉の気が狂ってしまうとは……。二人は、そこまで考えが及ばなかったのです。

虎吉の狂った有様を見て、二人の動揺は、大いなるものでした。

そして、二人は誓ったのです。このことは、二人だけの秘密にしておこうと。

後々分かったことですが、虎吉の父親は、泥棒ではありませんでした。虎吉の父親のことを快く思っていない人物がいて、その人物が仕組んだ罠だったようです。

そして、その人は逮捕され、虎吉の父親は名誉を回復したようです。

そして、年月が流れ、同窓会が行なわれたのです。

「さて、どうしてるだろう……」

そう答えた大吉の言葉には、陰鬱な響きが込められていました。それも、その筈です。芳彦と大吉が、虎吉を廃人に追いやってしまったのですから。

「知らないなあ。おいら、知らねえ」

大吉は、グラスを持つ手が、わなわなと震えてしまいました。もう少しで、床に落ちてしまったところでした。

その後、二人から笑みは消えました。そして、二人にとって、重苦しい雰囲気は漂ったままの同窓会となってしまいました。

「なあ、大吉ちゃん。この前、不思議な体験をしてしまったんだよ」

芳彦は、酒を飲んだ為、かなり赤みを帯びた顔で話し始めました。

芳彦は、あの夜、あの公園での奇怪な出来事のことを話しました。

大吉は、暫くは芳彦の話に黙って耳を傾けていましたが、次第に青褪めた表情に変わって来ました。何故なら、大吉も同じような経験をしたからです。

それで、大吉はそれを芳彦に話しました。

そして、二人はお互いに驚き合ったのです。

「大吉ちゃん。これは、偶然ではないよ」

「ああ。おいらもそう思うよ」

そして、二人は一層重苦しい気持ちになって来ました。

「あの宙返りといい『ケケケケ』という笑い声といい、もしや」

「そうだよ、あいつだよ」

「……」

「つまり、虎吉だよ」

大吉は、今にも泣き出しそうな顔をしています。二人にとって、一層重苦しい同窓会となってしまいました。

「虎吉。おいらたちに、仕返しに来たんだろうか……」

大吉は、苦痛に満ちた表情で言いました。

「いやあ。おいらたちが、毒を入れたことを誰が知るもんか！」

芳彦は、気丈な表情を浮かべては言いました。

「それもそうだ」

「誰も、知らんぞ！」

芳彦は、自らに言い聞かせるかのように言いました。

それから、二人は、虎吉の話題は避けました。同窓会の他の人達にも、虎吉の話はしようとはしませんでした。

そして、同窓会は間もなく終わりに近付いて来たので、芳彦は暫く会うことはないであろう学友たちの顔振れをもう一度、見回しました。

すると、隅の方で、じっと芳彦の方を見据えている眼を眼に捕えました。

それは、権藤平助です。平助は、虎吉の数少ない友達だったのです。

平助は、芳彦と視線が合うと、慌てて眼を逸らせました。

芳彦は、そんな平助に近付いて行っては、

「平助！ 元気かい」

と、平助に話し掛けました。

しかし、平助は、何も言いません。

「どうして、話をしないんだい？」

と、芳彦が言っても、平助は口を開こうとはしません。

それで、芳彦は大吉を呼びました。

大吉は、平助を見ると、

「何とか言えよ、平助」

と言いました。

そして、遂に二人は、平助に命令口調で詰め寄りました。何しろ、芳彦と大吉は、小学校の時は悪ガキだったのです。芳彦と大吉は、小学校の頃を思い出したのかもしれませんが。

すると、平助は、

「君たち、僕に近付かないでくれ！ この人殺しめ！」

と、芳彦と大吉に向かって、声を荒げました。

同窓会の会場は、昔を懐かしむ人たちの話し声でどよんでいましたが、その声は、芳彦と大吉の耳にはっきりと聞こえました。

そして、そう言うと、平助はさっさと部屋から出て行き、二度と部屋に戻って来ませんでした。

そして、やがて、同窓会は終わりました。

芳彦と大吉は、やがて、古びた校舎を後にしました。

そうです。同窓会は、彼等が学んだ小学校の校舎の中で行なわれたのです。

その校舎は、十二年を経た今も、昔と殆ど変わりはありませんでした。校門へと続く道から眺める風景も、昔と殆ど変わらず懐かしいものでした。まるで、十二年前に戻ったと錯覚する位でした。

芳彦は、大吉に、

「明日、虎吉の家に行ってみよう」

すると、大吉は黙って肯きました。

校舎から離れるに連れて、学友たちは、一人、そして、また、一人という具合に、それぞれの家路について行きました。そして、やがて芳彦と大吉も別れました。

芳彦は、虎吉がどうしてるのか、知りたかったのです。「ケケケケ」という笑い声しか発せなくなってしまった虎吉。そして、あの公園で眼にした怪物のような男。その二人が、同一人物なのか、確かめたくなかったのです。

<虎吉は、どうしてる>

その思いで、芳彦は胸が一杯だったのです。

5 哀しき学友

翌朝、芳彦と大吉は、連れ立って虎吉の家を訪ねました。訪ねるといっても、「こんにちは」と言って、玄関扉を開けるわけではありません。虎吉の家の様子をそれとなく探りに行っただけなのです。

まだ、朝早い時間です。通りを歩いている人は、まだ見当りません。ただでさえも、閑散とした村なのですから。

しばらく田んぼの畦道を通りぬけて、虎吉の家の前まで来ました。

二人は、今や必死でした。虎吉がどうしてるのかを知るまでは、村を後に出来ないという程でした。

やがて、虎吉の家の前に着いたのですが、虎吉の家は荒れ果てて、正に荒ら屋になっていました。庭の草は伸び放題。所処にある窓ガラスは、ひびが入ったり、欠けたりしていました。人の住んでる気配は、感じられませんでした。

それで、大吉は、

「虎吉たち、引っ越してしまっただけかな」

と、神妙な表情を浮かべては言いました。

すると、その時、芳彦は、

「おや……」

と、小さな声で言いました。というのは、伸び放題の草の中で、人の動く気配を感じたからです。

「誰だ、そこにいるのは！」

芳彦は、声を上げました。

すると、草の中から一人の男が姿を見せたかと思うと、一目散に走り出しました。

「待て！」

二人は、声を荒げて、その男を追い掛けました。そして、やがてその男に追い付き、組み付きしました。

「顔を見せてみろ！」

芳彦は、俯いている男の顔をたくし上げました。

「お前は！」

その男は、顔見知りの男でした。即ち、権藤平助だったのです。

「平助。お前、何しに来た？」

芳彦は、強い口調で言いました。しかし、平助は、芳彦から眼を逸らせ、何も言おうとはしません。

「何かしゃべろ！」

と、大吉は強い口調で言いました。

すると、平助はやっとのことで、芳彦と大吉を見やり、そして、衣服に付いた土を手で払うと

「お前たちが、来ると思ってたんだ」

と、掴み掛かるかのように言いました。

「俺たちに、何か恨みでもあるんか？」

芳彦は、平助を睨み付けました。

「お前、おいらたちが人殺しと言っただろ。何でそう言ったのか、話してみろ」

と、大吉は平助に命令口調で言いました。しかし、平助は何も言いません。

「何でそう言ったのか、話してくれよ」

と、今度は芳彦が哀願するかのように言いました。

すると、平助は重い口を開けました。

「おいら、見たんだよ」

「何を見たんだ」

「あんたたちがよ。虎吉の水筒に毒を入れたのを」

そう平助に言われると、芳彦と大吉の表情は、真っ青になりました。

二人だけの秘密だった。その筈だった。それを平助が見ていたなんて！ 二人は、何も言うことは出来ません。

「おいら、たまたま理科室に忘れたノートを取りに行ったんだ。すると、その時、あんたたちが棚から毒薬を取り出したのを見たんだ。おいら、びっくりしちまった。

そして、あんたたちの後をつけたんだ。すると、肝っ玉が潰れたよ。何と、その毒薬を虎吉ちゃんの水筒に入れたんだもん。

虎吉ちゃんは、水筒の水を飲んだらいかん。

おいらは虎吉ちゃんにそう言おうと思ってた。

ところが、おいら、直行に呼び出され、ノートを写してやらなければならなかった。直行は弁当を食べ、その間においらは直行の為に、ノートを写さなならんだ。直行はおいらが用があると言っても、おいらを自由にしてくれなんだ。おいらが戻った時は、もう遅かった。虎吉ちゃんが、狂ったように暴れとったがや」

直行とは、クラスの中のガキ大将でした。そんな直行に、平助は子分のようにあしらわれていたのです。

そう平助に言われると、芳彦と大吉は、決まり悪そうに下を向きました。

「おいらがもう少し早く戻っていたら、虎吉ちゃんは、毒を飲まんで済んだんだ」

「……」

「だが、おいらの所為じゃない！ あんたらが、虎吉ちゃんを殺したんだ！ いや、殺したようにしちまったんだ！」

「虎吉は、生きてるのか？」

芳彦は、呟くように言いました。

「ああ、生きてるよ」

「何処にいるんだ？」

と、大吉。

「ここにいるよ、虎吉ちゃんは！」

と、平助が言い、後ろを振り返り、大声で、

「虎吉ちゃん！」

と、虎吉を呼びました。

すると、草が生い茂っている茂みの中からその男が姿を現しました。

「ぎょ！」

芳彦と大吉は、思わず後退りしました。

あいつです！ 「ケケケケ」と、無気味な笑い声を上げていたあいつです。あいつが、蛭田虎吉だったのです！ 黒覆面を被った蛭田虎吉だったのです！

「逃げなくていいよ」

平助は、芳彦と大吉に言いました。

それで、芳彦と大吉は、後退りを止めました。

虎吉は、

「ケケケケ」

と、笑いました。間近でその声を耳にすると、一層無気味に感じられます。

「虎吉ちゃん。芳彦と大吉だよ。分かるかい？」

平助が虎吉に言うと、虎吉は、

「ケケケケ」

と、笑ったのです。

平助は言いました。

「虎吉ちゃん、分かるんだよ。あんたたちのことが！ 虎吉ちゃん、あんなに喜んでるよ」

虎吉は、「ケケケケ」と笑い続けました。それは、丁度、犬が飼い主がご飯を持って来た時に、飛び上がり喜んでるかのようでした。

「何か言ってやれよ」

平助は言いました。

それで、芳彦は恐る恐る口を開きました。

「虎吉かい？」

すると、虎吉は笑うのを止め、犬のような無垢な眼でじっと芳彦のことを見据えました。

「虎吉ちゃん、本当は何も分からないんだ。ただ、虎吉という自分の名前とおいらのことしか分からないんだ。おいらのことだって、毎日顔を合わせてるから、分かるだけなんだ。ただ、人に可愛がってもらいたいだけなんだよ。虎吉ちゃん、誰にも相手にされない。だから、『虎吉ちゃん』と、誰が呼び掛けても、嬉しいんだよ」

と、平助は哀しそうに言うのです。

「おいら、あんたたちが憎かった。虎吉のことをこんな風にしたあんたたちが、ぬくぬくと成長して行くのが！ だから、あんたたちを尾行し、虎吉ちゃんを使って脅かしてやったんだ。ジャ

ングルジムで逆立ちをしたのも、おいらが虎吉ちゃんに仕向けたのさ。虎吉ちゃんは、動物のように、しつけることが出来るのさ。

また、あの裏長屋で人が死んでた。あれは、実は人形さ。芳彦を脅かしてやりたかったのさ。大吉の後を追って、木立の上で大吉を脅かしてやったんだ。大吉のアパートの窓ガラスを叩き、大吉を脅したのも、おいらが仕向けたのさ。

虎吉ちゃんは、人間としての頭脳は死んでしまっても、動物的感觉は、人一倍敏感になったのさ」

そう平助は言う、

「可哀相な虎吉ちゃん」

と言っは、虎吉の頭を撫でてやりました。

すると、虎吉は、

「ケケケケ」

と、笑いました。

芳彦は、そんな虎吉の顔をじっと見据えました。そして、

「何故覆面を被ってるんだ？」

と、怪訝そうな表情で言いました。

「何故、覆面を被ってるのかって？ そりゃ、素顔は見せることは出来ないからさ。毒薬にやられた醜い素顔は見せることは出来ないのさ」

と、平助は再び哀しそうに言いました。そして、更に話を続けました。

「虎吉ちゃんのお父さんもお母さんも、病気で死んでしまったんだ。だから、今や虎吉ちゃんは、孤児なんだよ。施設も、こんな化け物みたいな人、預かる事は出来ない、拒否されたんだ。だから、おいらが面倒を見てやってるんだよ。おいらが、虎吉ちゃんの親の代わりなのさ。虎吉ちゃんのお母さんが、死んで行く時に、おいらに、虎吉ちゃんのことを頼むと哀願したのさ」

その話を聞くと、芳彦も大吉も、今にも泣けて来そうな思いに捕われてしまった。

「すまない。おいらたちの所為で……」

芳彦は、虎吉の前で土下座しました。しかし、虎吉はまるで仔犬のような純真な眼で芳彦を眺めるだけです。

「止めな！ 虎吉ちゃんには、何を言っても、分からないんだよ」

平助はそう言う、虎吉の頭を撫でました。

すると、虎吉は、

「ケケケケ」

と、笑いました。

「おいらたち、虎吉の為なら何でもするよ。なあ、大吉」

芳彦は、小さな声ではあるが、きっぱりとそう言いました。

そんな芳彦に、大吉は、

「ああ」

と、肯きました。

「本当だな」

と、平助は芳彦を睨み付けるかのように言いました。

「本当だとも！」

芳彦と大吉は、声を揃えて言いました。

「だったら、毒薬を飲めよ」

「毒薬？」

「ああ。虎吉ちゃんが飲んだのと同じ毒薬を！」

「……」

「お前らも、虎吉と同ように、廃人になるんだ！」

平助は、芳彦と大吉を非難するように言いました。

「それは……」

芳彦は気まずそうに言いました。

「何でもするって、言ったじゃないか！」

「……」

そう平助に言われても、芳彦と大吉は、言葉を発することは出来ません。

そして、三人の間に、重苦しい沈黙が流れました。まさか、平助がそのようなことを言うなんて、芳彦も大吉も思っていなかったのです。

「どうなんだ！」

平助は、芳彦と大吉に詰め寄りました。

しかし、二人は何も言うことは出来ません。

すると、その時、虎吉が、

「ケケケケ」

と、笑いました。平助は、そんな虎吉の頭を撫でました。

「虎吉ちゃんが、お前らを虐めるなと言ってるよ」

平助は、そう言いました。

芳彦は、その平助の言葉は、嘘だと思いました。虎吉に、理性はないからです。

でも、この時程、救われた気分を感じたことは、今までにありませんでした。

そして、平助は、更に話を続けました。

「虎吉ちゃんは、芳彦と大吉に、僕に分まで生きてくれ。そして、立派な大人になってくれ。そう言ってるんだ。なあ、虎ちゃん」

平助はそう言うと、虎吉を見やっては、

「虎ちゃん、宙返りして、見せてやりな」

と言いました。すると、虎吉は、

「ケケケケ」

と無気味な声を発したかと思うと、勢いよく走り出し、見事に宙返りをして見せたのでした。

芳彦と大吉は、まるでその光景を夢か幻を見るかのように、ただ茫然と見やっただけでした。

思えば、ほんの悪戯から起こった悲劇。その為に一人の人間を狂わし、自らは加害者として重い十字架を背負って行かなければならなくなった。しかし、その背景には、醜い妬みが潜んでいたのだ。秀でた者への妬み。オリンピックの選手となり、脚光を浴びるかもしれない虎吉。それに対する妬みが、無意識にあのような恐ろしい悪戯に走らせたのだ！

「平助。おいら、自首するよ。毒を入れたのは、おいらたちだと」

芳彦は、力無く言いました。

「馬鹿！ そんなことをして、虎吉が元に戻ると思うか！ そんなことをして、虎吉が喜ぶと思うか！」

平助は、虎吉に向かって叫びました。

「虎吉！」

すると、虎吉は再び勢いよく走り出し、宙返りして見せたのでした。まるで、オリンピックの晴れ舞台で演技をしてる選手のように！

<終わり>

この作品はフィクションであり、実在する人物、団体等は一切関係ありません。